

露伴全集

第三十卷

昭和二十九年七月十日印刷
昭和二十九年七月十六日發行

露伴全集第三十卷

頒價六百六拾圓

著作權者

幸かつ

田だ

文あや

編纂

蝸くわ

牛ぎう

會くわい

發行者

岩

波

雄

郎

印刷者

山

田

一

雄

印刷所

精

興

社

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地

發行所

株式會社

岩

波

書

店

電話(代表)九段(33)八四八六番
振替口座東京二六二四〇番

牧製本

目次

川柳と紋	大正元年十月	一
ニコ／＼に寄す	大正元年十月	八
樂地	大正元年十一月	一一
苦境	大正二年五月	一四
損をせよ	大正二年七月	一八
急ぐ勿れ	大正二年九月	二〇
内證	大正二年十一月	二四
人の姿	大正三年一月	二七
樹の相	大正三年四月	三〇

浮世繪 大正三年五月

偽の北齋 大正三年六月

名畫は畫中に詩あり 大正四年一月

關東の女と上方女 大正四年十月

「白根山籠の情話」について 大正五年一月

言葉づかひ 大正五年一月

はづかしがり 大正五年二月

女の手紙 大正五年六月

燈火可親 大正五年九月

専門家崇拜 大正五年九月

餘力ある人々に 大正六年一月

三三

四四

四五

四八

五二

五七

六〇

六三

六八

七〇

八六

蛇と女 大正六年一月

一一六

菓子 大正六年十二月

一二〇

しだみ 大正七年五月

一二五

十千 大正七年七月

一二八

道路 大正九年一月

一三一

みやげの手ぶり 大正十年十月

一五二

櫻のくさぐさ 大正十一年四月

一六三

震は亨る 大正十二年

一六六

簡素治新といふこと 大正十三年一月

一七〇

山のもの 大正十三年七月

一八三

無題 大正十三年七月

一九一

漱玉記 大正十三年

河水

正直 大正十四年三月

明治初期 大正十四年三月

饗庭篁村と須藤南翠 大正十四年六月

それ鷹 大正十四年六月

旅 大正十四年六月

運命は切り開くもの 大正十四年九月

将棋のたのしみ 大正十四年十一月

紀文大盡 大正十五年一月

淡島寒月氏 大正十五年四月

一九四

二〇八

二一二

二一七

二二六

二三四

二四〇

二四四

二五二

二五九

二六五

讀書の態度 大正十五年九月

二七一

樋口一葉 昭和二年二月

二七四

疇昔の讀賣新聞 昭和二年四月

二八二

名工出世譚 昭和三年一月

二八六

沼波武夫氏を悼む 昭和三年二月

二九二

明治文壇雜話 昭和三年三月

二九六

遅日雜話 昭和三年三月

三〇三

下岡蓮杖の思ひ出 昭和三年五月

三一二

おんばこ

三一四

おうもり 昭和四年三月

三二五

大倉翁と初對面の日のこと 昭和四年三月

三三一

春

昭和四年三月

三三四

羊のはなし

昭和六年一月

三三五

爐邊漫談

昭和六年一月

動物性の古い酒

三五六

鮫の袴

三六〇

魂魄のむき

三六五

ふしぎ

三七〇

農家の生くる道

三七七

名著文庫の刊行當時

昭和七年十月

三八二

桃花と河豚

昭和八年五月

三八五

菖蒲湯

昭和八年五月

四〇二

菊

昭和八年九月

四〇三

書談 昭和九年四月

嗚呼春廼屋主人 昭和十年三月

寺田君をしのぶ 昭和十一年三月

鯉 昭和十一年四月

鱸 昭和十一年七月

秘色青磁 昭和十二年四月

淡島寒月のこと 昭和十三年六月

米 昭和十三年十月

郡司成忠傳跋 昭和十四年十月

菊石の話 昭和十四年十一月

○ 昭和十五年一月

四〇七

四一七

四二五

四三〇

四四六

四八三

四九二

四九六

四九九

五〇四

五〇七

はねつるべ 昭和十五年八月

福 昭和十六年十月

有圖無題 昭和十六年十月

岩波氏のこと 昭和十七年十一月

五〇九

五一二

五一五

五二八

後記

五三三

川柳と紋

紋と云ふものは普通一般に家に定まつて居るものでありまして、名高い家の紋は自然と世間にも知られて居りますから、別段氏を聞かずとも紋を見れば判る理窟であります。随つて紋の種類も澤山であります、それに因んだ事情を云ひ顯はすことが出来ますから、川柳には時と紋が重なる體になり、又添へられる材料になつたりして居りますから、其句を透して其時代の、紋に對する考へを知ることが出来ます。

お味方に敵に二六が十二文

これは、眞田家の紋は六文錢であります、豊臣と徳川とが天下分け目の戦ひの折、眞田家にては一方には六文錢の旗を翻へして大阪方の味方をし、又一方徳川方にも六文錢の眞田の一族が居て大阪方を惱ましたので、六文錢の旗が兩方に翻つたと云ふ處から、二六の十二文と洒落たのであります。

日本の蛇の目唐まで睨めつけ

蛇の目は加藤清正の紋でありますから、其朝鮮征伐に行つて唐まで睨め付けたと云つたのであります。

富士は孝鷹は忠義の夜討哉

富士は孝とは、頼朝富士の牧狩に父の敵工藤祐經を討ちし曾我の兄弟で、鷹は忠とは、主君の仇を報じた四十七士のことではありますが、一富士二鷹と云ふ諺がありますから富士の下に鷹をもつて來ましたので、それに淺野家の紋は鷹でありますから、それをきかして義士を顯はしたのであります。

雀まで出る處

に淺野家の紋で、雀は上杉家であります。上杉は吉良の縁家でありますから、淺野の浪士に吉良 討たせまいと氣を配つて居りましたので、鷹の騒ぎに雀迄と洒落たのであります。

梅ヶ香 一武鑑にしるき御大祿

加賀家は梅鉢の紋でありますので、さう云つたのであります。

九十ぬけても馬鹿でない軍師哉

それは、ぬけるとは百の中から九十ぬくれば足らぬといふ意味でありますから、馬鹿であるべきですが、馬鹿ではない軍師だといふのは、九十六文は即ち百でありますから、九十六文から九十ぬけたら六文なる眞田の紋になりますので、さう云つたのであります。

巳みに餘り時宗家の紋にする

これは北條時宗が江の島辨天の御利益を蒙り鱗を頂いたといふので、紋を三ッ鱗にしたからであります。

加賀紋を引剥ぎ蛇の中に入れ

これは加賀騒動の中の女が悪事露顯して、蛇責めに逢つたのを詠んだものでありまして、加賀騒動ですから故加賀紋と云つたのであります。加賀紋とは當時ある一種の綺麗な紋の普通名詞であります。

質草は倒澤瀉さかが初めなり

倒澤瀉の鎧てふ裳裾にすがる鶴の紋といふ文句がありますが、倒澤瀉の紋のうちには倒澤瀉の鎧をまづ質に入れるだらうと、其貧乏を云つたのであります。

祖師は橘尊體は柘榴なり

お祖師は御存じの通り日蓮で、井桁の中に橘が其紋であります。尊體は柘榴なりとは、日蓮宗を守護する神様は鬼子母神で、この神様にはよく柘榴をあげますから、橘と柘榴とから詠んだのであります。

三つ星や片手切られた婆來る

三つ星は渡邊の紋でありまして、渡邊に手を切られた婆が來るといふ意で、これは芝居等でよくやりますから御存じでせう。

天草勢を馬鹿にする御紋なり

天草の亂の時に之を征伐に向つた大將は佐賀の鍋島で、其紋が蕘荷めうがでありますから馬鹿にする紋と云つたので、蕘荷を食べれば物忘れすると云ひますから、さう云つたのであります。

幸村は生きる氣でない紋所

亡者には棺の中に六文錢を入れてやる處から、眞田幸村が敗けると知れた大阪方に味方したのは、初めから生きる氣ではないのだといふのを、紋所の六文錢にかよはしたのであります。

縞に紋縫はせる奴は數が無し

これは縞の着物に縫ひ紋させるので、今日では粹まな人は皆やつて居る様ですが、この川柳を詠んだ時代は多くの人が縫ひ紋をするといふのではなく、着物の數のない人が縞の着物に縫ひ紋したとも取れますが、又さうではなく、縞の着物に縫紋する人は至つて少ないから、たまにやつてる人を見るとめづらしいとも取れます。

錢の遣ひ様大阪知らぬなり

これも眞田幸村のことで、大阪方が幸村の言を用ひ幸村を甘くうま使つたら、大阪方がさう容易たやすく徳川の

爲に亡ぼされはしなかつたらうにと、例の六文錢の紋で遣ひ様を知らぬと云つたのであります。

下總の内裡紋からしてが下卑^{げび}

相馬の將門の紋は馬のはねて居るのでありますから、誠の内裡の御紋は菊、將軍家は葵といづれも高尚なのに引替へ、僞大裡なる將門のはやつぱり紋迄が下卑て居るといふ意であります。

定紋であたりを圍ふよい花見

咲き亂れた花の山を、取り圍ふた幔幕の定紋で誰れそれ様と領づかれる高貴の方のお花見、幕の内では奥方や腰元衆が、今日を晴れ衣の煌びやかさも推し量られる、結構な御身分を詠んだ句であります。

劍菱の大紋を着る俄雨

劍菱といふ紋もありますが酒にも同じ劍菱の名がありますので、篠を束ねた様な大粒の雨が俄かにやつて來たので、傘のない身には屈竟のものと、そこにあつた劍菱の酒菰引つ被り驅け出した姿が、丁度大紋を着た様だといふ意であります。